

ナショナリズムに抗してネーションを構想する アルジェリア小説の展開と現状

鵜戸 聡

I. はじめに

1950年代に大きく開花するアルジェリア文学は、20世紀前半のヨーロッパ系住民による植民地文学において長らく自己の表象から疎外されてきたムスリム住民たちが、終に自らフランス語で筆を執ることによって誕生した。「フランスのアルジェリア」と呼ばれ、自らのネーションとしての自律性そのものも自明ではなかった時代に育まれた文学は、もとより「アルジェリア人」であることの権利要求であり、あるいは「アルジェリア人」であるとは何かを問うものであった。

II. ワタンかネーションか？

七年半に及ぶアルジェリア戦争(1954-62)は、「国民解放戦線」(FLN)の単一支配が続く独立国家の起源であり、新生アルジェリア国民(ネーション)のアイデンティティの中核に位置付けられることとなった。かつての「フランスのアルジェリア」を否認することによってワタンは恢復され、その存在は遡及的に承認されることになったが(例えば古代ヌミディア王国に遡る歴史観によって)、それがいったいどのようなものなのか、新しく出現した(かに見える)ネーションはいかにしてそれに接合するのか、を問うことがアルジェリア文学の大きな課題となる。

独立戦争初期にパリで発表されたカテブ・ヤシン(Kateb Yacine 1929-89)の小説『ネジュマ』(1956)では、未来形のワタンとして「胎児」の形象によってアルジェリアは想像され、不十分な現状の祖国(自らを十全に恢復していないワタン)が、しかし自らに内在させている可能性として、いわばイデア的に構想される。カテブの晩年の思想では、かの地における混淆の歴史を認め「アルジェリア人」であることを自らに任じるものが「アルジェリア人」であるとされ、多元的なネーションが実現する時空としてアルジェリアなるワタンが主張されるのである。この可能態としてのワタンは、一党独裁体制下のアルジェリ

アにおける公定ナショナリズムとタブー（党、軍、革命、イスラーム）への対抗概念ともなるだろう。

未だ生まれざる「胎児」としてのアルジェリアというモチーフは、65年の軍事クーデターによって「没取された革命」を批判するラシード・ブージェドラ(Rachid Boudjedra 1941-)の『離縁』(1969)において早くも反復される。アルジェリア人とは何者かが問われる現代史の契機として、独立戦争（起源）と90年代のテロの時代（転機）は繰り返し参照され、世代を変えて様々な作家たちがワタンの姿を未来に見据えて作品を著すこととなる。

以下、いささか恣意的ではあるが、代表的な作品に即して問題意識の系譜を概観したい。

III. 50-60年代： 独立戦争前後の「アルジェリア人」の生成

アルジェリアのみならず全マグレブにおける最初の本格小説とされるのが、ムールード・フェラウン(Mouloud Feraoun 1913-62)の『貧者の息子』(1950)だが、カビール地方の寒村を舞台にしたこの自伝的小説では、近代的な教育を受けた語り手が自らの幼年時代を反省的に語ることによって、「アルジェリア」なるものを意識することもない家族の肖像を描きながら、近代的個我と共同体的自我の乖離をパフォーマンス的に提示する。

一方フェラウンとほぼ同時期にデビューした学匠作家ムールード・マムリ(Mouloud Mammeri 1917-89)は、『阿片と鞭』(1965)の舞台を独立戦争末期に据え、植民地権力の介入による人間性の変容や、滅びゆく村会の共同体的言語の最後の光輝を描き、古い世界の崩壊とそこから生まれ出ずる新しい人間の可能性にかすかな希望を託しつつ、ほとんど文明論的な視線のもとに「アルジェリア人」の姿を捉えようとした。

半世紀にわたって執筆を続けたモハメド・ディブ(Mohammed Dib 1920-2003)は紛れもなくアルジェリア文学最大の作家の一人だが、後期の難解な作品が十分に理解されるには時間がなお必要だろう。『大きな家』など独立前に書かれた初期作品が現地ではよく読まれているが、70年代末の邦訳はアルジェリア戦争への興味から選定され、拷問を扱った短篇「タリスマン」(1966)と若い娘の政治意識の目覚めを描く『アフリカの夏』(1959)が選ばれている。

先述のカテブ・ヤシンは、1945年のセティフ蜂起を舞台にした戯曲「包囲された屍体」(1954)において、アルジェリア人という集合的存在を「屍体」のモチーフで描出するとと

もに、先祖たちとの連続性と断絶を独特の詩的存在論によって捉えようとする。同作は独立戦争中にブリュッセルで非合法上演を果たした。

当時、経済的・政治的理由でフランスに渡ったアルジェリア人は数多く、カテブもドイツも戦争中はフランスに滞在していた（フェラウンは停戦直前にアルジェで暗殺される）。マーレク・ハッダード(Malek Haddad 1927-78)の『君にガゼルをあげる』(1959)のように独立戦争期のパリを描いた作品もある。

独立戦争による村社会の崩壊と近代的国家観の受容（国民国家化）による世界観の変容を経験するなかで、この時期の作品には、多かれ少なかれ植民地における近代化（あるいは伝統の破壊）の経験が書き込まれており、部族、村会、名誉、言葉の高貴さ、迷信、マラブー、貧困といったモチーフが、小説家という近代的職能を我がものとした作者たちの視線に晒されることとなった。そこに見出せるのは「近代」を経験した主体（書き手／語り手）による<再帰的>な語りである。

IV. 70-80年代： 社会主義体制下のアラブ化・イスラーム化と公定ナショナリズムへの挑戦

ナビル・ファレス(Nabil Farès 1940-2016)の『ついてないヤヒヤー』(1970)は、アルジェリア戦争を背景に恋愛物語を綴った「感情教育」とも言われるが、独立を経て成立した新たなアルジェリア人意識の形成過程を描くものとも言えようか。新しいアルジェリア人の肖像、新たなワタンの姿がようやくアラビア語で表現されるようになるのも70年代である。アブデルハミード・ベンハドゥーガ(Abdelhamid Benhedouga 1925-96)とターハル・ワッタール(Tahar Ouettar[Wattar] 1936-2010)という二大巨頭が長編小説を発表してアラビア語小説の礎を築く。後者はベイルートやカイロの出版社からも作品を発行したため、当時国際的に知られたほとんど唯一のアルジェリア・アラビア語作家となった。

ワッタールの短篇小説『今週、シャヒードたちが帰ってくる』は、戯曲化され演劇史的にも重要な作品だが、革命の殉死者（シャヒード）として英雄に祭り上げられた戦死者たちが今週帰ってくる、という連絡を受けた（と信じ込んだ？）老人が道ゆく人々に「シャヒードたちが帰って来たらどうする？」と聞いて回ると、結局のところ皆「今更帰ってこられても困る」と答えることになるという「ゴドー」的な不条理劇だ。独立後早々に新しい社会に居場所を見つけ、あるいは利権を確保した者たちの保守化と「独立

戦争の英雄」を祭り上げる体制の欺瞞を巧みに描き出す。

強引なアラビア語化政策は社会に軋轢を生み、エジプトからアラビア語教師とともに「イスラーム原理主義」をも「輸入」したと言われるが、80年代は諸制度の限界が露呈するとともに、「ベルベルの春」と呼ばれるアイデンティティ闘争や食糧不足に端を発した「クスクス暴動」が勃発した。この時期に権威主義体制下で大きく変容する社会を描いて国際的な評価を得たのはターハル・ジャウート(Tahar Djaout 1954-93)の『骨探し人』(1984) やラシード・ミムニ(Rachid Mimouni 1945-95)の『部族の誇り』(1989)で、監獄小説を脱してポスト独立戦争の教養小説を確立した。一方ラバハ・ベルアムリ(Rabah Belamri 1946-95)の『傷ついた眼差し』(1987)は、自伝的主人公の失明経験という独特のプリズムを通して60年代を回想する。この3名は全て先住民ベルベルの一派カビール人であるが、アルジェリア人でありつつアラブ人ではない、というアイデンティティとフランス語の使用は無縁ではあるまい。

80年代の最大の成果はアシア・ジェバル(Assia Djebar 1936-2015)の大作『愛、ファンタジア』(1985) だろう。集合性としてのアルジェリア人を問題化するのにはカテブ・ヤシンに先例があるものの、アルジェリアの歴史性を初めて本格的に主題化したもので、史料を駆使して個人的な記憶と緇い交ぜにし、隠蔽されてきた女たちの「声」をポリフォニックに紡ぎあげることによって、ネーションの想像域に女性の姿をくつきりと刻み込む。

なお、レバノン在住で、エジプトでマフフーズ賞を受賞するなど、東アラブ世界でベストセラーとなったアフラム・モスタガーネミー(Ahlam Mosteghami 1953-)の『肉体の記憶』(1993)は、アルジェリアの文学シーンからは外れたところにあるが、革命世代の親たちを自分たちの世代と交差させ、恋愛の言語を通してアルジェリア戦争を生きた人々へオマージュを捧げた。

V. 90年代以降： テロルを越えて——原理主義批判とフランス語の再興

「暗黒時代」あるいは「鉛の時代」と呼ばれる90年代は、イスラーム救国戦線(FIS)と事実上の内戦に陥り、膨大な数のアルジェリア人がフランスを始め諸外国に亡命した。先述のジャウートを始め、多くの知識人も暗殺され、ジェバルの『アルジェリアの白』のように、犠牲者を追悼する作品も著された。現在最も人気の高い女性作家マイッサ・ベイ(Maïssa Bey 1950-)が『太初に海ありき』(1996)でデビューするのもこの頃だ。

80年代にフランスで登場した移民二世の文学とは別に、この時期にフランスに移住した作家たちの作品も急増する。今に至るまで旺盛な執筆活動で知られるアブデルカーデル・ジェマイ(Abdelkader Djemai 1948-)は『灰の夏』(1995)などの作品で、移民やテロの問題を取り上げる。『禁じられた女』(1993)や『私の男たち』(2005)で知られるマリカ・モケッテム(Malika Mokeddem 1949-)も女性の声を大胆に響かせる。

2000年代に入ると、元軍人のヤスミナ・ハドラ(Yasmina Khadra 1955-)が一連のテロ小説に続いて植民地末期を舞台にした通俗的な歴史小説を発表し、公定史観に沿ったメロドラマを作り上げる。その一方で、『蛮人の誓い』(1999)以来、アルジェリア社会に蔓延する権威主義的あるいは原理主義(サラフィズム)的イデオロギーを仮借なく批判し続けるブアレム・サンサル(Boualem Sansal 1949-)は、『ドイツ人の村』(2008)で史実に基づきFLN内部のナチス残党の存在を小説化し、『2084:世界の終わり』(2015)では架空の神権国家を描いてイスラーム主義への警鐘を鳴らすなど、苛烈さにおいて群を抜いているがために、仏独での高い人気に反比例して、国内はもちろん周辺アラブ諸国からも非難が集まった。

一方、パリの大学に進学した後『オデュッセウスの犬』(2001)で華々しいデビューを飾ったサリーム・バーシー(Salim Bachi 1971-)のような作家は、先述のジェマイと違い、アルジェリアではフランスの作家扱いをされている節がある。作品内容も関係するだろうが、21世紀にはアルジェリアで優れた文芸出版社が誕生し(かつては国営出版のみ)、著名作家が皆パリで作品を発表していた状況に変化が生じ、国内のみで出版する新しい作家たちが増えたことにもよるだろう。

ムスタファー・ベンフォードイル(Mustafa Benfodil 1968-)などはその代表作だが、その短篇「パリーアルジェ便、地獄クラス」(2003)は、アルジェリア戦争を戦った(とされる)「ムジャーヒディーン」(革命戦士)があらゆる特権を享受してきたことを風刺するとともに、フランス側に属していたために独立後に虐殺・追放されたアルジェリア人兵士(ハルキ)たちとの和解を描いた。

アラビア語では、ワーシーニー・アル＝アアレジュ(Waciny Laredj 1954-)が19世紀の反仏闘争の英雄アブデルカーデルを描いた『アミールの手紙』(2005)など、数々の歴史小説をものして人気を得る。モスタガーネミーを除けば、東アラブ諸国で最も知られたアルジェリアのアラビア語作家(フランス語の著作もある)となった観があり、湾岸アラブ諸国が近年多く設立した文学賞をいくつも受賞している。カテブやジェバルによる詩的で難解

な歴史のヴィジョンに比べると、リーダブルな物語によってアルジェリアの歴史を叙述するものと言えよう。

また近年では、モハメド・ディブ賞やアジア・ジェバール賞など、第一世代の作家たちの名を冠したアルジェリア独自の文学賞も増えており、それらを受賞して注目を集める若手も出てきている。最近『曲がり角の愛』(2016)の仏訳がパリで出版されたサミール・カーシミー(Samir Kacimi (1974-)はアジア・ジェバール賞のアラビア語部門、ロンドンで出版されたアミン・アイト＝ハーディー(Amine Ait Hadi 1982-)の『彼方の暁』(2015)のフランス語部門で受賞している(ベルベル語部門もある)。詩人でもある後者の作品は、90年代のテロを主題に難渋な詩的ヴィジョンを展開した小説で、むしろ60年代のカテブやディブを彷彿とさせる。

アリー・シバニー(Ali Chibani 1979-)の『私の空のポケット・私の割れた鏡：消毒液に漬けられた小さなゾフラの内蔵』(2016)も内戦時代を描いており、ゼロ年代のポスト・テロルの社会を描く風潮から揺り戻して、もう一度90年代を記憶し再考しようとする若手の意思が感じられる。一方、ケベックに渡ったカリム・アクーシュ(Karim Akouche 1978-)『母の宗教』(2017)はイスラーム主義を厳しく批判する。原理主義の誘惑と権威主義体制の欺瞞のあいだでワタンはどこへ行こうとするのか、その行く末に対して、あるいはどのようなネーションへと自らを形作って行くべきなのか、アルジェリア文学は積極的に介入しようとしているかのようだ。

VI. 終わりに

いま最も活躍めざましいのは2008年にモハメド・ディブ賞を受賞したカメル・ダーウド(Kamel Daoud 1970-)で、アルベール・カミュの『異邦人』を下敷きにした『ムルソー、対抗調査』(2013)が国際的な評判を呼び、フランスでは複数の大きな文学賞を受賞した。ムルソーに射殺される「アラブ人」をめぐってその弟なる人物を措定し、あり得たかもしれない名もなき人々の物語のヴァージョンを語り、あるいは騙ることによって、唯一の「歴史＝物語」なるものの欺瞞を暴いていく。この野心的なフィクションのフィクションは、『ロビンソン・クルーソー』や『ハドリアヌス帝の回想』などの(擬)回想文学の影響下に、再帰的な語りによる世界の再制作によって、ワタンの姿を批判的に脱構築してゆく。

ここに至って、いわば「真のワタン」を求めて、「革命」や部族の過去、隠されて来た女たちの声を描き、権威主義体制や宗教イデオロギーを批判して来たアルジェリア小説が、

これまで以上に意図的に「物語＝歴史」の多元性を主張し、ネーションの内部で競合する「起源」への執着が欺瞞に過ぎないことを暴こうとするのである。最後にその一節を引いて筆を擱くことにしたい。

いいかい、ここオランではね、皆が起源に取り憑かれているんだ。ウレード・エル＝ブレド、町の、くにの本物の息子たちだ。誰もがこの町のかげがえのない息子になろうとする。最初の息子、最後の息子、最古の息子に。この物語には私生児になることへの不安があると思わないかね？ 誰もかれもが、我こそが——自らと、その父あるいは祖先が——ここに住み着いた最初の者であり、そのほかの者はみんなよそ者、〈独立〉で十羽一絡げにお偉くなった土地なし農民どもなのだ、と証し立てようとする。どうしてこの手の輩は不安のあまり墓場を引っ掻き回すような真似をするんだろうってずっと思ってたよ。ああ、そうさ、きっと財産のことで恐れ、争っているんだ。
[…] (Kamel Daoud, *Meursault, contre-enquête*, Arles: Actes Sud, 2014, pp. 21–22.)